

俺と親友(♂→♀?)が男女のお付き合いを始めるまで

海里 燦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺、柄本 陸と桜川 海翔は小学生から仲が良く、高校生になった今でも毎日一緒に通学している。

この親友と呼べる関係をこの先もずっと続けていけたらいいと思っていた。

だがある日、突然女子になってしまった海翔。

そんな海翔に女の子らしさを感じていく俺。

お互いにだんだん惹かれていって、ついには……。

全7話で書き終わっています。毎日更新予定。

※この作品は「小説家になろう」にも掲載しています。

※タグは保険として入れている物もあります。

目次

彼が彼女になる前の朝	1
彼女が初登校する朝	6
彼女が不機嫌な日の朝	10
俺の気持ち芽吹く朝	17
彼女の部屋に入る朝	22
彼女が彼女になる朝	26
俺と彼女のそれからの朝	33

彼が彼女になる前の朝

「おはよう」

「おはよ、陸」

朝晩と昼間の寒暖差が大きくなってきた11月の朝。

俺、柄本えもと 陸は通学路の途中にある家の前で待っていた親友の

桜川さくらがわ 海翔かいとと挨拶をかわした。

「もう朝はめつきり寒くなったな」

「陸だったら、最近何日かに一回はそう言ってるけど」

「そうだっけか？ 寒いのが苦手だから、つい文句を言いたくなるんだろうな」

最近衣替えを済ませた詰め襟の制服を着た俺たちは学校に向かうべく歩き始めた。

「ねえ陸、昨日更新されたソシヤゲのストーリー読んだ？」

「途中まで読んだけど、ボスが倒せなくてそつから先が読めてない」

「え、その話をしたくてワクワクしてたのにまだ読めてないとは思わなかったよ」

いつも通り、他愛ない話に花を咲かせる。

海翔とは小学生からの仲だ。最近気付いたのだが、小学校から高校まで仲良く出来る友達というのはなかなか珍しい。単純に進学先が別れてそのまま疎遠になってしまったり、大きくなるに連れて趣味趣向が合わなくなってしまうったり。

そういう意味では、この先も海翔とは引き続き円満な関係を築いていきたい。

と思っていると肩を叩かれたので、そつちを見るとほぼ同じ高さにある海翔の顔が映る。

「陸、今何か考えてた？」

「ああ、悪いな。いや……俺たちもでかくなつたよなあ、つて」

海翔に言うには少し恥ずかしい事を考えていたので、誤魔化すためについて考えていなかった事を言ってしまった。

「どうしたの急に」

一度誤魔化すとまた誤魔化して取り繕わないといけない。どうしようかと思つた矢先、ちよつとよく自動販売機があつたので指を差す。

「俺たちが会つた頃は自販機の一番上のボタンにギリギリ届くくらいだったのに、今じゃ余裕で届くようになったな、と思つて」

「そんな事考えてたの？」

「まあ」

「なんとか誤魔化せたようだ。」

「……知り合つた時はボクの方が大きかつたんだけどね」

「そうだったか？」

「そうだよ、ちよつとだけ勝つてたもん」

「まあ、今は同じくらいで落ち着いたけどな」

そう言うのと、海翔はうつ向いて肩を震えさせてボソツと呟く。

「……じゃない……」

「え？」

「同じじゃないし。陸の方が2センチ高い」

「ええ……」

確かに身体測定の際にそんな話をしたけど、根に持つてたのか……。

いや、海翔は負けず嫌いだから、負けたのが悔しいのかもしれないな。

「その気にしてないって態度……勝者の余裕ってやつかなあ」

「いや……最後に測つた時からもう半年くらい経つしどうなってるか」

「来年は絶対勝つからね」

続けて「牛乳飲まきや」と呟く海翔。

「飲み過ぎて腹壊すなよ、あと牛乳だけじゃなくてバランス良く食べるのも重要だぞ」

「母親みたいな事言うなし。後、やっぱり勝者の余裕感が出ててちよつとむかつく」



高校までは電車を使う。

家から駅までが10分、そこから電車で15分、駅から高校までまた10分。

中学までは地元で歩きか自転車だったから、最初は通学に電車を使うのに大人になったような気がして興奮してたけど、慣れてくるとただ面倒なだけであった。電車が遅れるのを考慮して早めに家を出たりとか。

幸いにも混む時間帯を回避出来ているのか、満員電車というのはまだ経験した事はない。

高校の最寄り駅で電車を降りた俺たちは、引き続きゲームとか今日の授業の話をしながら歩を進めていると、視界に見知った後ろ姿を見つけた。

「お。あの後ろ姿は中原さんじゃないか？」

中原 なかほら 優奈 ゆなさん。俺と海翔のクラスメイトで、明るい性格と小動物のような愛らしさを持ち、そのうえ誰とでも分け隔てなく接するという創作物にしかないような超のつくコミュ力の持ち主でクラスの人気者である。

そして――

「多分そうだろうね。で、なんでそれをわざわざボクに言うのかな？」

「いや、だって海翔、中原さんの事好きだろ？」

膝上丈でヒラヒラと舞う中原さんのスカートを目線で追いながら海翔に問いかける。

「違うし」

「そこで否定されてもな。普段から視線で追っていたり本人を目の前にした時の態度で丸分かりなんだけど」

特に、中原さんから話しかけられた時の海翔は緊張してしまうのかガチガチになる。見てて面白い、とはさすがに本人には言えない。

「陸こそ今えっちな視線を送ってたような気がしたけど、中原さんに興味あるんじゃないの」

「俺だって健全な男子高校生だからな。膝上で揺れるスカートの中には興味あるさ」

「うわー、サイテーなこと言ってますよー……」

「相手がお前じゃなきゃ言えないってこんなこと……。だから、他の人には間違っても言うなよ?」

呆れたようにはいい、と返事した海翔だったが、続けて質問を飛ばして来た。

「で、結局陸は中原さんのこと好きなの?」

こういう話はあまり好きじゃないんだけどな。心の中でため息をつく。

「クラスメイトとしては好きだな、中原さんがいる事でクラスの雰囲気明るくなるし。ただ、男女としての仲になりたいかと言われたらノーかな」

「なんで? 中原さんかわいいと思うけど」

「確にかわいいとは思うのは否定しないけど、俺としてはもう少し落ち着いた感じのの方がいい」

海翔はどこか安心したように長い息を吐いた。

……それで好きだつてことを隠してるつもりなんだろうか。

「そういえば、陸からそういう話聞いた覚えがないけど、好きな人とかいないの?」

「俺か? うーん、別にそういうのはまだいいかなって」

「陸って本当に高校生? 枯れちゃってない?」

「こうやって海翔と話してるだけで満足してるし、愛だの恋だのに興味が出ないんだよ」

「……今の発言はちよつとないわあ」

思っている事を話ただけでドン引きされてしまった。どうして。

「いや、お前だけじゃなくてクラスの奴らとだからな。その中でもお前が一番だつてだけであつて」

「陸、勘違いされるからボク以外にはその話しない方がいいよ?」

頭に手をつけてため息を吐く海翔。そんなおかしい事言ったか、俺?

「ねえ、陸。もうそろそろ今年も終わるし、来年はボクたちも高校2年生だよ?」

「そうだな」

「3年生になったら受験がどうかで遊びにくい雰囲気になっちゃうでしょ？ その前にさ、制服デートとか高校生ならでは、みたいなこととしておきたくない？」

何かのスイツチが入ったかのように力説する海翔。ともあれ、言っていることは大体正しい気がする。

「その気持ちはわかる。なるほど、海翔は中原さんと制服デートしたいってことか」

「そ……茶化さないでよ」

そうだけどって言おうとしたのであれば、全く隠しきれてないけどそれでいいのか、我が親友よ。

というか、別に取るつもりがあるわけでもないから素直に言ってもいいんだけどな。海翔には海翔の考えがあるだろうし、いくら親友であっても言いたくないことだってある。

「確かに現役で制服デートっていうのは惹かれるわ。機会があったらやってみたいかもな」

「機会があったら……って、作ろうとしないとそういう機会はできないよ？」

「でも、積極的にやろうとは思わないし」

そんな風に言う俺を見て、海翔は良い事を思い付いたという風に「じゃあ、勝負しようよ」と持ちかけてきた。

「勝負？」

「そう。どっちが先に彼女作れるかって勝負」

「そんなの好きな人がいる海翔の方が有利じゃん」

「だから好きな人いないし。そもそも、仮にいたとしても付き合えるかが分からないじゃん」

「それもそうか……まあ、一応受けてやるよ。だからって好きな人を探すとかそういうのはしないからな」

そうして、戦いの火蓋は切られたが、お互いに何の進展がないまま1ヶ月、2ヶ月と時間が過ぎていき、俺がこの約束を忘れた頃、俺と海翔の間に大きな出来事が起こるのであった。

彼女が初登校する朝

「うう……下がスースーする……」

隣を歩く海翔が愚痴る。

「よく女の子たちは毎日こんな頼りないのを穿けるね……」

自分の着ている物に対して、俺にも聞こえるように。

「気を付けないとパンツ見えちゃうよこれ……パンツじゃなくても、脚が出てて周りから見られるのも落ち着かないし」

今までの男の変声期を過ぎた低音ボイスではなく、思わず聞き入ってしまふような心地の良いソプラノボイスで。

「スカートも穿いてないように感じるのかと思ってたけど、裾が脚に当たる度に嫌でもスカート穿いてるんだと意識しちゃうよ……」

数瞬の後、何も返さない俺に対して文句があるのかじとーつとした目線をぶつけてきた。

「……なんか言つてよ」

「あ、ああ。その……ごめん」

「なんだよう、こうなってるからも今まではちゃんと話せてたから、制服着たくらいでそんな対応変わっちゃうなんて思わなかったよ」

隣の女子は唇を尖らせる。

「それは海翔が今までの服を着てて、小さくなったくらいにしか思ってたからかな。でも、そうやって女になったのをまざまざ見せつけるとちよつとな」

「……これからまた大きくなるんだよ。つていうか早く慣れてほしいかな。陸とは今まで通りに喋ったり遊んだりしたいし」

「……善処する」

やはり俺の顎辺りまで低くなってしまった身長を気にしているらしいのは、うちの高校の夏の制服であるセーラー服を着た女子高生。ぱっちりとした目に二重ふたえのまぶた、目に入ってしまうのではないかと思わず心配してしまう長いまつげ。その瞳は不安そうに揺れているように見える。

慣れていない制服が恥ずかしいのだろう、少し朱がさした柔らかさそ

うな頬に全体のバランスを整えるように存在する小さな鼻に、綺麗な桜色の唇にも目が奪われる。

肩口ほどまで伸びた黒い艶やかな髪は、てっぺんには天使の輪ができていて、触ったらさらさらさらで気持ち良さそうだ。

高校生女子の平均に届いていないと言っていた低めの身長も相まって、かわいい系の美少女が俺の隣を歩いている。

だけど、その中身は俺の親友である海翔なのである。

そう。どういう理屈かは分からないが海翔は女子になった。

今から1ヶ月ほど前の4月の終わり。ゴールデンウィークの連休が始まるという頃に全身に激痛が走って意識を失い病院に緊急搬送。次に目を覚ました時には連休は終わっており、身体も変わっていたらしい。

原因は病気らしいのだが、本人もよく分かっておらず医者からは遺伝子がどうこう言われた時点で理解を放棄して、他の人にうつつたりといった心配はない事だけ覚えてたんだと。

俺も海翔が倒れたとは聞いていたが、それ以上の情報が入って来ないし、面会謝絶だったので会いに行くこともできないまま、連休の間は悶々とした気持ちで過ごした。

そして、いざ面会謝絶が解けて会いに行ったら、海翔の名前が書いてある病室に見知らぬ女子がいた。「ボクが海翔だよ、陸」なんて言うから何の冗談だと思ったし、手の込んだドッキリだと信じたかった。

でも、軽く話しただけで目の前の美少女が海翔なのだど直感的に理解してしまった。笑い方とか喋り方の癖、みたいなのがどうしようもなく海翔のまままで、こういう時によくあるらしい俺と海翔だけが知ってる秘密を確認し合う必要もなかった。

それからリハビリとかで海翔は入院を続けたけど、少し前に退院。今日が女子になって初登校……という訳だ。

ちなみに、女子なのに「海翔」では今後おかしな目で見られるという事で、「海」に改名したと聞いたが、なんとなく気に食わず海翔と呼び続けている。

「ねえ、陸」

名前を呼ばれたので声のした方に視線を向ける。

少し前までは同じくらい目の視線だったのに、今は目を合わせるために海翔を見下ろさなくてはいけない。

逆に、海翔が俺を見る為には見上げる形となるが、今は恥ずかしいのか顔は正面より少し下を向けて視線だけをこっちに、つまり上目遣いでこちらを見ていた。

もう一度言うが、今の海翔は一般的に見て美少女である。その美少女が至近距离で上目遣いをしているのだ、中身が親友海翔だと分かっても心臓に悪い。

「どうした」

「制服……おかしくないかな」

巻かれているタンポポの花の色をしたスカーフを指で摘まんで持ち上げながら聞いてくる海翔。不安からなのか、その瞳が揺れているように見える。

今日は海翔が女子になってから初めて学校に行く。事情はもう担任の先生から話してくれているのだが、やはりどう見られるのか不安なのだろう。

「そうだな、馬子にも衣装って感じだな」

「……それ、ほめてないよね？」

うちの高校の夏用のセーラー服はデザインが女子からかわいいと好評らしく、それだけを志望動機にしてしまう人もいるのだとか。そんな物を美少女が着ているのだ、似合っていない訳がないのだけど、海翔の緊張をほぐそうとわざと茶化してみた。

……決して照れ隠しではない。

「まあ、おかしくはないと思うぞ」

「それならいいけど」

「笑われたりしたって大丈夫だ……俺がいるからな」

ぽかん、とした表情になる海翔。

……美少女ってどんな表情でもかわいいんだな。なんて、馬鹿な事を考えていると、溜まっていた不安を全て吐き出すように海翔が笑いだすのであった。

その笑い声も鈴が転がったような可憐な物で……ああ、かわいいな、チクシヨウ。

それに体は変わったとしても中身まで変わった訳じゃないはずだ。仮に他のクラスメイトからの接し方が変わろうと、俺くらいは今まで通りにした方が海翔も安心するだろう。

「陸がいてどうにかなるの？ 不安だなあ」

ひどい言われようではあるが、内容に反してその声は弾んでいた。「味方がいるだけで安心できるだろ。何かあったら俺のところ来い、今まで通りの感じで接してやるから」

「なんだそれ、そこは普通は『俺が守ってやる』とかでしょ」

できる限りのことはするつもりだけど、どこまでできるかはわからない。それに今の海翔に近付きすぎると、これまでの関係性が変わってしまう気がして。

「……そこまで言いきる自信はないんだよ」

「かつこわる〜」

そう言っつけられけらと笑う海翔。その澄んだ笑い声は聞いてて心地良い。どうやら少しは不安を払拭出来たようだ。良かった。

「……でも、ありがとね」

「……おう」

小さく聞こえたお礼は、もしかしたら独り言だったのもしれない。でも、聞こえた以上は応えない訳にはいかなかった。

その時に見た海翔の横顔はほっとしたかのように微笑んでいて、心なしか赤くなっているように見えて。

こいつは俺の親友で、元は男なんだということとは分かっているながらも……それを見た俺の心臓は、ドクンと一度高鳴った。

彼女が不機嫌な日の朝

6月も終盤。

海翔が女子になっての初登校の日から1ヶ月が経った。これまで特に大きな問題は起こっていないけど、これはクラスの人気者の中原さんが海翔を気にかけてくれたのが大きい。

ただ、中原さんが言うには「海^海ちゃん^翔の事、良く思っていない子もいる」らしいし、気を払っておかないとな。

当の本人は最初の不安はどこへやらといった様子で学校生活を楽しんでるっぽいけど。その受け入れの早さは見習いたいわ。

もしかしたら好きな中原さんと距離を縮める事が出来たのが嬉しいのかもしれない。いつの間にか下の名前で呼び合ってるくらいの関係になってるし。

「おはよ……」

「おはよう、今日は遅いじゃないか……」

ガチャリと海翔の家のドアが開き、挨拶をしながら海翔が出てくる。それに応じながら振り返って海翔の顔を見て驚いた。

「どうした、顔が真っ青だぞ」

「うん、大丈夫だよ……多分」

声にも覇気がない。どこか体調を崩したと見える。

「体調悪いなら無理せずに休んだ方がいいと思うけど」

「大丈夫だって。ちよつと……ちよつとお腹が痛いだけだよ。原因も分かってるし」

ふむ、腹痛か。いよいよ夏本番も近付いてきてアイスや冷たい麺類がおおいしくなってくる季節だから後の事を考えずにいっぱい食べてお腹を冷やしたのかもしいな。

「ここのところ暑いからって冷たい物ばかり食ってたんだろ？ 気をつけるよ？」

「……うん、そう……だね。……心配どうもー」

心配の言葉をかけると海翔からはどこか呆れたような、素っ気ないような返答が返ってくる。

「俺、何か変な事言った?」

「いや、何もおかしくないよ。ありがとね」

「ぎこちない笑顔を向けてくる海翔。その理由は体調が悪いからなのか、それとも……。」

◆ どこかすつきりしないまま、俺たちは学校へ向かって歩き出した。

海翔が女子になった直後は「歩くのが速いよお」って文句を言われてた。歩幅が小さくなったから、男だ前った時より遅いのは当然と言えば当然の話だ。

それで、海翔はもう女の子なのだ、と自分に言い聞かせて最近ペースを合わせられるようになってきた。でも、今日は歩くスピードがいつもより遅い。

海翔の家を出発したのも遅かったし学校に着くのは遅刻ギリギリかもしれない。普段からかなり余裕を持って出発していてよかったと思える瞬間だった。

「本当に大丈夫か?」

「薬も飲んでできたし大丈夫だって。心配しすぎだよ」

歩みの遅い海翔を気遣う言葉をかけると、若干イライラされながらもようやく駅に着く。さつきから心配しているだけに妙に強く当たられているけど、体調が悪い時は機嫌だって悪くなるし、仕方ないと思う事にした。

結局、海翔の家から駅まで20分もかかっただけで、海翔が男だった時からすると倍の時間がかかっている。ただ、駅に着くころには海翔の顔色もだいぶ良くなっていた。

「薬が効いてきたか?」

「うん、少し楽になってきた。心配かけてごめんね」

平気であるのをアピールをするように駅の階段を上り始める海翔。膝が隠れるくらいの丈のスカートのフリフリと揺れるのを見て、後を追いかける。このまま立ち尽くしていたら見てはいけない物が見えてしまうかもしれないからな。

……興味がないわけではないが。

海翔の体調も良くなつたのに一安心したのもつかの間。

ホームに着いた俺たちは電車を待ちながら普段より騒がしいアナウンスを聞いていると、どうやら近くを走っている別の路線が運転見合わせていて、その振替輸送をしている都合で少し電車が遅れているらしい。

「電車、混んでるかもな」

「はあ、どうしてこんな日に……まいつちやうねえ」

そして、ようやくホームに入ってきた電車を見てまたげんなりとした気分になる。窓から見える電車の中は人。人。人ですし詰め状態の満員電車だった。

「うえ……」

この状況を見た海翔もうんざりとしていた。

電車が停まり、開いたドアから降りる人数もまばらで大した空きは見られない。乗り換えがある駅でもないから当然ではある。

俺達が陣取ったドアから乗る人はいなかったので、すぐには乗らないで海翔に声をかけた。

「どうする？　せつかく体調良くなってきたのにこんなに乗ったらまた悪くなるんじゃないか」

「これ乗らないと遅刻になりそうだし。体調なら大丈夫だよ」

多分、と付け足す海翔。

俺としてはやや不安が残るけど、本人がいいって言っているんだから信じよう。ここでまた心配すると機嫌を損ねそうだし。

「わかった、じゃあ乗ろう。ただ、キツくなったら言えよ」

海翔がこくん、と軽く頷くのを見て電車に顔を向ける。幸い、降りた乗客がいたであろうドアの前のスペースが空いたままだった。

俺たちが降りる駅までこちらのドアはもう開かないので、都合がいい。

体調が悪い中で人に囲まれるよりは壁に寄り掛かれた方が楽だろうと思ひ、先に電車に乗り込んで海翔の分のスペースを確保した後で手招きすると海翔が乗り込んできた。

が、何しろ満員電車だ。余分なスペースがないからいつもより距離

が近いし、真つ正面から見つめ合う形になってしまふ。いや、少し上を見れば身長が低くなつた海翔を見なくて済むんだけど、キラキラと透き通つた黒目から視線を外せなかつた。

「あ、あんまり見ないで……」

「す、すまん……」

恥ずかしながら小声で抗議してくる海翔に謝ることしかできず、そうしているうちにドアが閉まつて電車が発進する。

その弾みで海翔の方にふらついてしまい、ちょうど海翔の頭の横に右手を伸ばしてドアを支えにバランスを取つた。偶然だけど、このポーズってどう考えても……。

「……壁ドン？ 古くない？」

海翔も同じ事を考えたらしい。

「違う、掴む物がないからこうなつただけだし」

「ふふ、分かつてるよ、冗談だつて。ただ、変に緊張するから手は離してくれない？」

「それって俺にドキドキしたつて事？」

「そんな訳ないでしょ」

からかつたつもりだったのに、なんて事ないように流されてしまつたので手を離そうとして……右手の方を見て、視界に映つた物を見て気が変わった。

「やっぱりやめた、このまま海翔をドキドキさせよ」

直接その理由を言いたくなかつたとはいえ、口から出た言葉に自分でも何言つてるんだろうと思つた。その証拠に海翔もはあ？ と呆れたような表情になる。

「何馬鹿な事言つてるの」

「……今のは自分でもどうかと思つた、すまん」

「じゃあ、手離してよ」

「それは、ほら、この先も揺れたら危ないからこのままでいさせてくれよ？ 海翔には悪いけどさ」

少しの沈黙の後で仕方ないなあ、とOKを出してくれたので、遠慮なく壁ドンを続ける事にした。

満員電車の中であまり話しているのも周りの人に迷惑なので、黙ってドアの窓から流れる景色をしばらくの間眺めていると、カーブに差し掛かった電車が傾いた。背中に他の乗客の体重がかかった俺は、やむを得ず海翔の方に身体を近付けていく。

手をついていなかったら海翔の方に倒れそうになっていたかもしれないな、危なかった。

……それにしても。

さらに俺が近付いたのが恥ずかしかったのか、うつむいて俺から視線を外す海翔であったが、そのせいで艶のある黒髪に浮かび上がっている天使の輪っかを間近で見ることとなった。

シャンプーのものだろうか、なんだか華やかないい匂いに鼻腔をくすぐられ、そのままの体勢で固まってしまう。

「……変態」

「ふらついただけだろ」

「鼻息がふんふんって荒くなった」

「……気のせいだろ」

「気のせいじゃないよ。だって、こんな満員電車の中なのに……」

そこまで言って何かに気付いた海翔は周りを見て、納得したように深く目をつぶった後、俺を見つめてくる。

隠し通そうとした事がバレたのと美少女に見つめられているのが相まって、恥ずかしさが限界を超え、今度は俺が視線を反らすのだった。



「満員電車って最悪……」

「同感だ……」

学校の最寄り駅で満員電車から解放された俺たちは、すでに疲れ果てた体を動かして学校までの道のりの歩いていた。

「人の熱気で暑いし」

「もうちよつと冷房効かせてくれても良かったよな」

そうだねえ、と同意の後で海翔が続けて問いかけてきた。

「ねえ……臭くなかった？ 汗とか」

「変態って罵倒しておきながら感想を聞くのか？」

「感想じゃなくてさあ……イエスかノーで答えられるじゃん」

「それならノーだな」

むしろいい匂いだっただとは言えるはずもなく、イエスノーで答えられて良かった……

「やっぱりにおい嗅いでたんだ……ばか」

どうやら馬鹿があぶり出されたらしい。

「……嗅ぐこうとして嗅いだ訳じゃなくてな、ふわっといい匂いがしたからつい」

「ついで」

ジト目で俺を見ているつもりであるのだろうが、見上げる事になる都合、どうしても上目遣いをされているようで心臓によくない。

……それは置いておくとして、ここは素直に謝った方がいいだろう、確かに他人に自分の体臭を嗅がれるのはいい思いはしないし。

「すまん」

「別に謝ってほしいわけじゃないんだけど……怒ってるわけじゃないし」

「そうなのか？ いやでも普通に考えて嫌だよなあと思って」

「嫌ではあるけど……今回はまあいいよ、守ってくれてた訳でもあるからね」

……気付かれてたか。

あの時、海翔の隣にいたのはサラリーマンの男の人だった。それに気付いた俺は、海翔と彼の間に付いた手をそのままにして牽制をかけていた。

「隣の人には悪かったけどな。勝手にそういう事をするかもしれないうって目線で見ってたんだから」

「陸の感覚ではそうだろうけど、こつちからすると近くにいる男の人にはそれぐらい注意しないとやっていけないんだよなあ」

「女子って大変だな」

「大変だよ」

足を止めて大きくため息をつく海翔であったが、その後、表情を変

えてこう言った。

「……だから、ありがとね。守ってくれて」

嬉しさを隠そうとせず、精いっぱい伝えようとするような笑顔を俺に向けてくる。

海翔からこんなに感情をストレートに伝えてきた覚えは今までなかったけど、これも女子になったのが関係しているのだろうか。

そう考えて、どこか複雑な気分になると共に向けられた笑顔の可憐さに思わず視線が釘付けになった俺は、気恥ずかしさもあって「おう」と軽い返事しかできないのだった。



「ボクが女の子になってから初めて学校に行く時、ボクを守る自信なんてないって言ってたのに、ちゃんと守ってくれたじゃん。電車に乗る時もボクがドア側になるようにしてたし」

「陸ったら自信なさげなくせにそういうのはさりげなくやってくるんだからほんとに……」

「ああ、お腹がうずくなあ」

俺の気持ちちが芽吹く朝

海翔が女子になっての初登校から3ヶ月ちよつとが経った、9月。楽しかった夏休みも終わって、学校がある日常に慣れてきたとある朝。

海翔の家に向かう途中、ふあ、と口からあくびが出た。

昨日あったことが衝撃的過ぎてあまり寝られなかったのが原因だ。

授業中に寝落ちしないように気をつけなきやな。そんなことを考えながら海翔の家に着いた時にはもう海翔は家の前でスマホをいじって待っていた。

その時、俺の知らない男が海翔に近付いていき、それに気付いた海翔が楽しそうな笑顔を男に向けた後に腕を組んで、ふたりでどこかに出かける、そんな光景が寝不足でろくに働いていない頭によぎった。

「……相当キてるな、これは」

こんな想像をしたのも、昨日の出来事——海翔が告白されている現場に出くわしてしまったせいだ。

本当に偶然だった。忘れ物をした俺が放課後、廊下を歩いていると誰もいないはずの空き教室から話し声が聞こえた。

普段、人気のないところから話し声が聞こえてきたら気になるのが人間つてもので、別に悪いことをしているわけでもないのに、なるべく物音を立てないように教室に近付いて聞き耳を立てた瞬間、はつきりところこう聞こえた。

「桜川 ^{海翔}海さん、好きです」

その言葉を聞いた瞬間、すぐさまその場から離れなくてはという焦燥に駆られた。なんでかその場にはいけないと思った。

焦りながらもなるべく物音を立てずにその場から離れるので精いっぱい、返事とかそういうのを聞いている余裕がなかった。

おかげでほぼ物音を立てることはなかったから、多分、海翔も告白したやつも俺がいたことに気付いていないだろう。

そうして昨日はずつと告白にOKをしたのだろうか、いや、今はあんなにかわいい女子だけど元々は男だし付き合うわけない。でもま

さか……。と、そんな堂々巡りな考えともややもやした気持ちで離れなくて夜も寝られず寝不足……。という訳だ。

海翔が女子になった頃、俺だけは男親だった時友のまままでいようと決意してたけど、こんな状態じゃもう……。いやいや、ダメだ、弱気になる俺。

海翔は親友なんだ！よし。

「陸？ 陸ってばー！」

どうやら考え事に集中してぼーっとしていたらしい。いつの間にか海翔が近付いてきていた。

「ああ、おはよう海翔」

「おはよ……。じゃなくてー！ どうしたのさ、そんなところに立ち尽くして。気分でも悪い？」

「心配かけたなら悪いな、少し寝不足なだけだよ」

「寝不足う？ またソシヤゲのやりすぎとかでしょ。まあ、体調が悪いとかじゃないなら良かった」

◆ 普段の行いから余計な勘繰りをされずにすんだ俺は、深く突っ込まれないうちに、じゃあ行くか、と言うと学校に向けて歩き出した。

なんとなく気まずい雰囲気を感じているのは俺だけだろうか。

そう思っ隣を歩く海翔の顔をチラッと見ると、どこか居場所が悪そうな表情を浮かべていた。告白されたのをどう伝えようか、そんなことを考えている……。のような気がした。

そんな表情でもかわいいのだから、美少女ってのはずるい。 …… 中身は男の親友ではあるはずなのだが。

そのまま海翔の様子を伺っていたら、会話することなく駅が目前といるところまで来てしまっていた。

「ねえ陸」

「なあ海翔」

これ以上、今の空気を引っ張りたくないと思を決して声をかけたら、なんと海翔も同時に俺の事を呼んできた。

同時に話を切り出した時ってどうするか迷うよな……。と、悩んで

いる間に先に海翔の方が続きを口にする。

「あー……陸から先どうぞ？」

「いや、海翔の方が早く切り出してたじゃん」

「そうだけども」

先に駅の階段を上がり始める海翔。制服のスカートから覗く膝裏が俺の視線と平行になった辺りで、これ以上立ち止まっていると見てはいけない物が見えてしまうと気付き、急いで海翔の横に並んだ。

それにしても、スカートを穿き始めた頃は膝が見えるか見えないかくらいの長さだったと思うのだけど、いつの間にか膝がはつきり見えるようになってるな……って今はそれどころではなかった。

「じゃあ、俺から言わせてもらおうけど……昨日、告白されてたよな」

「え、なんで知ってるの……ってまさか」

「聞こうとしたわけじゃないんだけど、偶然近くを通りがかって……すまん！」

「告白してきた人は気付いてなさそうだったけど、人の気配は感じたから誰かに聞かれたなあ、とは思ってたらまさか陸に聞かれてたとはね」

はあ〜と大きく溜息をつく海翔。

「ちゃんと自分から言おうと思ってたんだけどなあ。踏ん切りが付かなくて……よし、言おうって覚悟ができて声をかけたら、まさか陸も同じタイミングで言ってくるとは思わなかった」

「俺も言い出すのに時間かかったけど、被るとはな」

「うん、ボクたちお似合いかもね」

「お似合いって……」

またひとりだけ先に行った海翔は階段を上りきってこちらを振り向く。

「冗談だよ、じょうだん」

楽しげな笑顔を向けてくる。

最近、海翔の笑顔を見る度になんとか胸が苦しくなる……気がする。

「それで……どうだったんだよ」

「どうって……何が？」

「その……返事とかいろいろあるじゃん」

「え、聞いてなかったの？」

鞆を持っていない方の手で肩まで伸びた髪をくるくるといじりながら言う。ここ最近でよく見るようになった仕草だ。それがなんだか絵になっていて見入ってしまう。

「他人の告白を盗み聞きするほど嫌な性格してないから。第三者が聞いてたら悪いと思って、お前が好きですってのを聞いてすぐにその場を離れたんだよ」

嘘ではない。聞き耳立てていてどうかと思うかもしれないけど、他人の告白の場に居合わせるつもりなんてないのだ。

……相手が海翔じゃなかったとしてもだ。

「でも、ボクにはなんて答えたか聞くんだねえ？」

どこか嬉しそうだけど、いたずらな笑顔を浮かべる海翔。

「そりやな……告白してきたやつと付き合うなら、彼氏でもない俺が毎朝一緒に登校するわけに行かないだろ」

「ふーん……それだけ？」

意地悪くさらに突っ込んで聞いてくる。

「海翔との時間が減ると思ったら嫌だなんて……ほら、今も休みの日に遊んだりするから、そういう機会も減らした方がいいだろうし」

「そっかそっか、それだけ陸はボクが他の男子と付き合うのが嫌なんだね」

海翔は何か満足したかのような、安心したかのように笑顔を向けてきた。

その笑顔を見て俺の心臓が大きく跳ねた。

「ほら、ちゃんと答えたんだからそろそろ答えを教えてください」

「……断つたに決まってるじゃん。相手のこと全然知らないし、付き合えるわけないよ」

「そうだよな、知らない人から告白されても困っちゃうよな。それに――」

海翔は元々男だし、男と付き合うのは嫌だろ？ そう続けようとし

て言葉を止めた。

誰が誰を好きになるかは個人の自由だし、何よりも……俺が感じている胸の高鳴りがこれを言ったらいけないと告げている。

「それに？ 何？」

急に足を止めた俺の顔を下から覗き込んでくる海翔。狙っているのかいなのかは分からないけど、上目遣いが心臓に悪い。

「いや、これからも今まで通りでいいかと思ったら安心してな」

「そ……うだね、これまで通り。うん、これまで通りだね」

何か引つかかる様子ではあるが、納得はしたらしい海翔。

もしかして……もしかするのかもしれない。

「ねえ、陸。これからも、これまで以上によろしくね？」

「……っ。ああ、こっちこそよろしくな」

嬉しそうに、満面の笑みで大きく「うん！」と答える海翔を見て、抑えきれなくなった胸の高鳴りの原因を素直に受け入れることにした。

今、はつきりと分かった。

——俺は、海翔の事が異性として好きなんだと。

彼女の部屋に入る朝

「おじやましまーす……」

社交辞令として挨拶を済ませてから海翔の家に上がる。当然無断ではなく、家の前で仕事に向かう海翔の母親である桜川さくらがわ 弥生さんやよいに鉢合わせて、その時に許可は貰っている。

……家だけでなく海翔の部屋に入る許可も。本人の許可は貰っていないけど、弥生さんいわく「陸くんなら大丈夫」らしい。

「……何が大丈夫なんだろうな」

さて、どうして俺が海翔の家に上がり込むことになったのかと言えば、海翔を起こすためだ。

というのも弥生さんが寝坊してしまい、海翔にも声をかけたが起きてこなかったようだ。そのまま弥生さんが仕事に行かなくてはいけない時間となったために、泣く泣く家を出たらちようど俺が到着したところだったらしい。

「家の中はさすがに寒くない……な」

10月も終わりが見えてきた今朝、急に冷えこんだ。

昨日までは夏を思わせる暑さだったのに、ここまで冷えると体感ではもう真冬がやってきたように感じる。いや、冬本番はもつと寒いだろうけどさ。

そんな一晩で季節が半周したように錯覚してしまった朝。昨日まで着ていた夏用の物ではなく、詰め襟の制服を着て家を出た。

海翔への気持ちで自覚した俺は、あれから……特に何もしていなかった。俺が行動を起こして関係性が変わってしまうのが怖かった。臆病だと笑ってくれてもいい。

この間、それとなく海翔が男の頃に好きだった中原さんとの仲について聞いてみたら「いっぱい助けてもらっちゃったけど、今では一番仲良くなっちゃったねえ」と感慨深そうだった。

その後で「女の子の中ではだからね？ 嫉妬しないでね？」と頬を少し赤くしながら、からかうような笑顔でフオローをしてきた。そんな海翔に少し戸惑いながら「してないから」と返した。多分、その時

の俺の顔も赤かったと思う。

「はあく……」

冷えた指先を吐息で暖める。

あと少ししたらもう冬、あつという間に十二月になるだろう。そうしたらクリスマスという大きなイベントがある。それまでには告白をして、海翔と一緒に過ごしたい。

……拒否された時の事は考えたくもない。

最近は無沙汰だったとはいえ、何度も上がっていた頃の記憶を頼りに海翔の部屋へゆつくりと静かに向かう。

海翔は一人っ子で父親は朝早い仕事をしているから、今この家は海翔ひとりのはず。だからこれから寝ているであろう海翔を起こしに行くのだからそんなに静かにしなくてもいいのだけど、朝の静かな空気を壊したくなかった。

女の子になった海翔の部屋に入るのが初めてだからか、近づいていくほど心臓の鼓動が早く大きくなっていき、海翔の部屋の前にたどり着いた時には自分以外の人にも聞こえるのではないかと思うほどに弾んでいた。

深く深呼吸をして少しだけ気持ちを落ち着かせた後、意を決してコンコン、とノックをして中にいるはずの海翔に声をかける。

「……いとう？入るぞ？」

名前を呼んだつもりだったが、最初が言葉になっていなかった。

元男だとはいえ外見だけで言えば美少女、そして好きな人と部屋でふたりきりになるのだ、緊張して何が悪い。

「海翔？」

反応がなかったので、もう一度ノックをして呼び掛ける……が、やはり反応なし。

今度はコンコンコン、とノックの回数を増やし一呼吸おいて「本当に入るぞ？」とドアに問いかけてみる。

……やはり反応がない。部屋に入って近くで声をかけたり、最悪の場合、直接揺すったりする必要もありそうだ。

「入るからな」

まだ収まらない、それどころかさらに大きくなる鼓動とは逆に、なるべく音を立てないようにして海翔の部屋に入る。

これから部屋の主を起こそうとしているのに、なんで音を立てないようにしたのかは自分でもわからなかった。ドアノブを回した音やドアを閉めた時の音で起きてくれる可能性だってあったのに。

起こしに来たのは間違いないのだが、自分でも気付いていないところで海翔の寝ているところを見たいと思っているのかもしれない。

スイッチを操作し、部屋の明かりをつける。これで起きてくれたら楽だったんだけど、まだその気配はない。

明るくなつた部屋を見回す。家具の配置などは特に記憶と大きく変わつてはいなかったが、ベッドの横に折り畳み式のテーブル、その上にはやや大きめの鏡と液体の入った容器や小物が複数置かれていた。それに、部屋の匂いも記憶と違う。こんな甘い匂いではなかったはずだ。

……そんな素振りは見なかったけど、ちゃんと化粧とかやってるんだな。なんだか複雑な気分になつた。

次に目に入ったのは部屋の片隅にかかった夏用のセーラー服だった。初めてそれを着てきた日のスカーフを持ち上げる仕草や赤らめた表情の事を思い出す。

それから海翔の夏用セーラー服に慣れるまでは一緒に歩く度にドキドキしたっけな。

でも、それも今日で一旦見納めだろう。まあ、移行期間だしもう何回は見られるかもしれないけど。

正面に見えるベッドの上に乗っている毛布に包まれた塊に目を向ける。

盛り上がっている形から、おそらくこっちを向いて横になって少し背を丸めているように見える。

「海翔、起きろ。いい加減準備しないと学校に間に合わなくなるぞ」

やや大きめの声で言ったつもりであったが、ベッドの上の塊はもぞもぞと少し動くだけだった。

「おーい」

追加で呼び掛けても状況に変わりはない。許可なく女子の身体に触るのはいかなものかと思うが、仕方ない、身体を揺するか。

「これからお前に触るけど、決してやましい気持ちはないからな、決して」

多分聞こえていないだろうけど、予防線を張ってからどこに触るのがいいか一瞬だけ考え、肩がベストだと判断し海翔に向かって手を伸ばして、海翔の右肩に触れる。

「……海翔、起きろ」

毛布越しだというのに想像よりもずっと華奢だった肩を揺らしながら声をかけると、海翔は「う……ううん……」と少し艶かしい声をあげた。

なんだかいけない事をしている気分になるのでそんな声を出すのはやめてほしい、そんな抗議の意味を込めてさらに揺すってみるが、効果はないようだ。

さて、どうするか。布団でもはいでみるか……？

ため息をつき、次の行動に移ろうと海翔から手を離れた瞬間、毛布の塊から勢いよく手が伸びてきて俺の手を掴み、ベッドの方に引き込もうとしてくる。

それに驚いてバランスを崩し、思わず海翔のベットの方に倒れた俺の視界に入ってきたのは——手を出した時に頭も一緒に出たのだから——まるで計画通り、とでも言わんばかりにイタズラな表情をした海翔の顔であった。

彼女が彼女になる朝

「おはよ」

ベッドに横になってしまった俺に対して、さっきのイタズラな笑顔から一転して優しい笑みを浮かべて何事もなかったかのように朝の挨拶をかけてくる。

その姿はモコモコと暖かそうな素材のルームウェアを着ていて暖かそうだ。

「ああ、おはよう。いくつか言いたい事はあるけど、いきなり引き込もうとしてくるのはやめろ。危ないから」

「そこに握るのにちょうどいい手があったからつい」

海翔の返答に今日何回目かわからなくなったため息を吐く。足りなくなつた分の息を吸い込もうとして少しだけ柑橘系のような爽やかな甘い匂いがする事に気付く。

……部屋に入った時は化粧品とかの匂いだと思っていたけど、まさか、これは海翔の匂いなのだろうか。そんな考えが頭をよぎり、考えがいけない方向に向かいそうになったの修正するように海翔に話しかける。

「今日はどうした？ 体調でも悪いのか？」

「いやあ、急に寒くなったからか布団が離れたくないってわがまま言っただけ」

「何アホな事を言っただけ」

悪びれた様子で、でへへとよく分からない声をあげて誤魔化そうとしている。そんな仕草でもかわいいと思ってしまうから顔面がいいのが少し羨ましくなってくる。

「アホな事じゃないよ。だって、陸の手すっごい冷たいもん」
「へ？」

握られっぱなしだった自分の左手の事を思い出す。冷えた俺の手にも毛布にくるまれていた海翔の小さな手から温もりが流れてきているようで、段々と温かくなってきた。

ていうか海翔の手、柔らかかった……！ しかもすべすべしてて触って

て気持ちいい……！

「そんな撫でるように触られるとちよつと恥ずかしいんだけど」

無意識のうちに手を動かしていたらしい。海翔の言葉で我に返った俺は急いで手を離す。

「ご、ごめん」

「ははは、ボクは寛大だからね。言うことを聞いてくれたら許そうじゃあないか」

ベッドに横になった状態でそんな事を言われても全く威厳は感じないけどな。

「無茶なお願いじゃなければ」

「簡単だよ」

そう言った海翔は俺に寄ってきて、俺と海翔が頭まで覆われるようにふわつと毛布をかけてきた。

そして、近付いた分だけ声を小さくしてお願いを口にした。

「……一緒に最初の授業サボろ？」

外見はかなりの美少女で、好きな人と同じベッドに寝ているのだ。そういう可能性をちよつとでも考えてしまったのは男子高校生として許してほしいところだ……相手の中身は俺と同じ男子高校生のはずなのだが。

そんな煩惱を振り払って目の前の親友を咎める。

「サボりは良くないだろ」

「真面目だなあ、陸は」

というか、顔が近い。海翔が喋る度に空気が動くのを感じるし、ささやくように喋っているのもなんだかゾクゾクする。それに部屋に入った時から感じていた柑橘系のような匂いが毛布の中に入ってから更に強く感じる。性別が違うとはいえ、これが同じ人類からする匂いなのだろうか。これは男子高校生には刺激が強い。

「親にお金出してもらってんだから当然だと思っけど」

「でも、今日の一時間は体育だよ？ まだ身体が寒さに慣れてないのにこんな寒い中で運動するのは体に良くないよ？」

……魅力的な提案に思えた。確かにこんな日にあまり運動したく

ない。我ながらひどい手のひら返しである。

ただ、海翔にはご立派な事を言った手前、すぐに同意したくない。

「ふふふ、男の子ってめんどくさいねえ」

「うっせ。というかお前もそうだったろ」

全部分かっていますよ、と言わんばかりにたれ気味なその目でこちらをじっと見つめてくる海翔。毛布の隙間から入ってくる光が目に戻射してキラキラ輝いていてきれいに見えた。

「ほら、ボクの中あったかいでしょ？」

「変な表現を使うな」

「変って何が？ よく分からないからちゃんと言明してほしいなあ」

くすくすと柔らかい笑顔を浮かべる海翔。これ絶対分かっててやってるな。

「今のいるのは海翔の中じゃなくて、海翔の毛布の中だろ？ そもそも

も、人の中に入れる訳がない」

「入れなくても入れる事は出来るよ？」

「なっ……！」

その発言につられてしまい思わず視線を下の方にやると、太すぎず細すぎず、柔らかかそうで健康的な透明感のある白いふとももが大きく露出しているのが見えた。一瞬穿いてないのかと思っただが、上とお揃いのデザインでモコモコのショートパンツを穿いているようだ。

どうやら俺がどこを見ていたのか気付いたらしい海翔が上に着ているモコモコを下に伸ばしてふとももを隠そうとした。でも脚全体を当然隠す事は出来ていない。

「……今えつちな事考えてたでしょ」

凶星だけど、当然肯定する訳にはいかない。

「そんな脚出して寒くないのかね、って思ってたただけだよ」

「ふーん……まあそういう事においてあげよう」

「あげよう、じゃなくてそうなんだよ」

「素直じゃないねえ」

ニヤニヤと意地の悪い笑顔で見つめてくる。今日の海翔を見ると笑顔にもたくさん種類があるんだなあど気付かされる。

「世の中の男子高校生が素直になつたら大変な事になるぞ」

「今はボクと陸しかいないんだから大丈夫だよ」

「いや、それでもダメだろ」

「そっか、残念」

「何が残念なんだよ」

「陸の弱みが握れると思つたのに」

それを言うなら、海翔のベッドで一緒に寝ている今の状況も結構危ないと思うのだが、海翔は気付いていないようだ。

なんて考えていたら左手が柔らかい感触に包まれる。

「うん、暖まつたね」

海翔が手を繋いできていた。しかもいわゆる恋人繋ぎというやつである。

「お、おい海翔……?」

海翔の急な行動に理解が追い付かず、名前を呼ぶ事しか出来なかつた。

「ねえ、陸はいつになつたらボクの名前を呼んでくれるの?」

「いや、呼んでるじゃん」

「ちがくて。ボク、もう海翔じゃなくて海なんだけど、陸はいつまでもどこまでも海翔海翔って」

「それはその……」

女子になつてからもずっと海翔と呼び続けていたから、今さら海と呼ぶのが気恥ずかしい、なんて言いにくい。

そりゃあ、最初は親友が女子になつたなんて受け入れられなかったが、今や好きになつた相手なのだ。名前で呼びたくない訳ない。

「か……お前はいいのか? 呼び方変えたらクラスのやつらにある事ない事言われるぞ?」

海翔と呼びかけて、今はそう呼ばない方がいいと思つて途中で変えた。

今まで男の時の名前で呼んでいたのに、急に女子今の名前で呼んだら周りになんて言われるか。ただでさえ男子から女子になつて注目を集めていたのがようやく落ち着いてきたのに、また視線が集まつてし

まうかもしれない。

「言わせたい人には言わせておけばいいんじゃない？　それか、言われるであろう内容を事実にしちゃうとか」

「それって……そういう事？」

「さあ？　でも、陸とボクの考えている事が同じならそういう事だよ。でも、はつきりと言葉に出してほしいかな」

「……わかった」

まさか海翔も俺と同じように考えていたのか。ずっととうじうじしていた俺とは違って勇気を出した伝えてきた海翔はすごい。

さて、海翔にここまで言わせてしまったのだ。今度は俺がちゃんと伝えなくちゃな。

決意を決めた俺はベッドから起き上がると海翔も倣って起き上がった。

「海翔……いや、海」

「……うん」

海の目を見つめる。

そのキラキラとした綺麗な瞳は俺のことを見据えていた。

「俺は海の事が女の子として好きだ」

言えた。女の子側からアシストされてではあるけど、告白する事ができた。

……情けないって言うな。

「でも、ボクは元々は男だったんだけど、それでも陸は良いの？」

「馬鹿だな。俺は今の海が好きなんだ。海が海翔であった事も含めてな」

「そっか。それって、ボクが海翔の時からそうだったの？」

「さすがに海翔の時はそう思ってたねえよ……気が合うしずっと仲良くしたいとは考えてたけど」

この発言には海も驚いたようだ。

「陸って、さばさばしてるように見えて意外と重いなだね」

「そう言われると思ってたから今まで口にしてなかっただろ」

「それはそうだね。でも、そう思ってくれてたのは嬉しいかな。ボク

も同じだから」

その言葉の意味を聞こうと口を開こうとした時だった。

唇が海の人差し指で押さえられて遮られる。

「ボク……わたしも陸の事が好きです」

そして、人差し指と入れ換えるように唇を近付けてきて——俺と海の唇がかすかに重なった。

突然の出来事と海の唇の柔らかさに呆気にとられている間に唇がゆっくりと離された。

「本当はね、女の子になった時に転校した方がいいって勧められたんだ。ほら、こういうのってあまりよく思われないし、酷いといじめになったりするからって」

「……」

返す言葉がなかった。

人と違うところがあると確かに排斥されやすい。そういう意味では誰も何も知らない遠くに行ってしまうのは間違いではないと思う。

「でもね、やっぱり陸と一緒にの学校がいいなって思ってた。クラスの人にどう思われるかは不安だったけど、陸だけは受け入れてくれるって自信あったから。大丈夫だった」

そういう意味じゃわたしだって陸のこと何も言えないよね、と続ける海。さつき俺がずっと仲良くしたいって思っていたことについて言ってるのだろう。

「俺はそんなご大層な人間じゃないんだけどな。まあ、そこまで信頼されてたとは光栄だよ」

「実際受け入れてくれたじゃん。今まで通りに接してくれるって。それだけでどれだけボクが救われたと思う？」

「……性別が変わっても仲良くしてたかったからな」

まるで俺が聖人か何かのように称えることに、ぼつが悪くなった俺に対して優しい笑顔を向ける海。両想いだとわかってすぐなのに、この笑顔を他の人に向けてほしくないと思ってしまう、やっぱり俺は”重い”のかもしれない。

「うん、わたしもずっと同じ気持ちだったよ。だから、ね？ ……これ

からもよろしくね？」

首を軽く横に倒す海はとてもかわいらしいかった。いつかも同じような仕草をしてたっけな。

そんなことを考えながら、俺は返事の代わりにキスでお返しをする。海も一瞬驚いた様だけど、受け入れてくれた。嬉しかった。

——味なんかしないはずなのに、そのキスはとんでもなく甘かった。

俺と彼女のそれから朝

「あのシーン、すごく熱かったよな」

「うんうん、ボク今回のストーリーのメインキャラ持ってないんだけど、一気に欲しくなっちゃった」

今日も今日とて、俺と海の話題の中心はソシヤゲだった。

ベッド告白からもう少しではや2ヶ月。

クリスマスまであと数日という中、雪や凍結してる道を横目に終業式までの消化期間となっている学校に向かっていた。

……あれから俺と海がどうなったかと言えば、大きくは変わっていない、と思う。

今まで通りソシヤゲだったり、他愛ない話題で盛り上がったたり。

「俺は前引いてたけど、育ててなかったから育て始めたわ」

「いいなあ。今ピックアップされてるけど、冬物の服買ったから回せないんだよねえ」

「この間着てた服？ あれめっちゃ似合ってたな」

「そうだよー。陸に喜んで貰えたなら、わたしも嬉しいよ」

告白した時は一人称を“わたし”にしてた海だったけど、どうやら使い分けているらしい。普段は“ボク”で女の子的な要素が絡んでいると“わたし”という具合だ。親友と恋人が同居しているような距離感は、俺に取っては心地が良かった。

「すげー可愛かったもん、また着てくれるのを楽しみにしてる」

「……もお」

べた褒めされたことが恥ずかしいのか、歩く速度を少し上げて俺の前に出る海。しっかり防寒対策して着膨れしている上半身に比べて、下半身はスカートと結構肌の透けたタイツだけでやや寒そうに見える。

「陸って、脚フェチなの？」

そう声をかけられて海の顔を見ると、じとーっとした視線を向けられていた。

「わたしの脚よく見てるよね？」

「……寒くないかと思つてただけだよ」

「寒くない時期も同じように見てたけどなあ」

さらに視線の湿度を上げて俺のことを見つめてくる海。

足を止めていた海に追いついた俺は、横に並んだ海に向かって言う。

「肌色が見えるとそつちを見ちゃうのが男子高校生だからな。それが好きな人の物ならなおさら」

「ばか。それで逃げるつもりなんでしょ」

それから海は「でもまあいいか」と続けて。

「……わたしも好きだよ」

赤面しながらそういう俺の親友兼彼女はとてつもなくかわいかった。

……他人からしたら見せつけてるようなもんだよな、これ。まあ、別にいいか。近くに誰もいないし。

「ひゃっ」

「つと……大丈夫か？」

隣から叫び声から聞こえたので、急いで細身の肩を掴む。凍結した部分で海が滑ったようだ。

「うん、大丈夫。ありがと」

「まだ凍つてる場所があるんだから気を付けろよ」

数日前、この時期では珍しく大雪が降った。踏み固められて凍結してしまつた道路とか、路肩には黒ずんでしまつた雪だった物の塊が居心地悪そうに残っている。

あの日はまた電車が遅れて満員電車になったりで大変だったな、と思ひ返していると手袋をしている右手が握られるような感触が。

「えへへ」

隣を見ると、同じく手袋をした海の左手が俺の右手を繋ぎ、嬉しそうに微笑んでいた。

「海、手を繋ぎたい気持ちは俺もわかるけど、転んだら危ないから止めておこう」

「そう思つてね、昨日見てたんだよ。この先、駅まではもう凍結してる

「どこないから」

「……隣のお姫様は昨日から手を繋ぐことを考えていたのか。なんというか、そんなに想ってくれていることが嬉しいような恥ずかしいような気持ちになる。」

「準備のよろしいことで」

「お褒めにあずかり光栄です！ だから、繋いでもいいでしょ？」

「ね？」と尋ねるように上目遣いで俺を見てくる。何度も見ている仕草なのに、毎回ドキドキしてしまうくらいかわいいんだよな。

「まあ、そういうことであればいいけど」

「やった！」

俺からの許可を貰った海は、何故か緩く握っていた手を一度ほどく。

「どうかしたか？」

「あのさ、手、繋ぐなら手袋越しじゃなくて……直接繋ぎたいな」

もじもじとした様子で自分のコートの裾をつまむ海。

その様子がかわいらしくて、ずっと見ていたい気持ちになるけど、それはさすがに海がかわいらそうだ。

「どうぞ、お姫様」

手袋を取った右手を差し出すと、海も同じように手袋を取った左手でおおずと手を握って……いや、恋人繋ぎになるように細くて白い指を絡めてきた。驚いたけど俺もこっちの方が良かったので、そのまましっかりとその小さな手を握る。

「……」

「……」

軽く右手に力を入れて海の小さい手をにぎにぎしてみると、海もぎゅつと力を入れ返してくる。喋ってはいないけど、まるで会話をしているようだった。

素手になった分、冷たい空気が直接手に当たるけど、それ以上に熱く感じる右手。俺の体温と海の体温が混ざって心地よく感じた。

「わたし、この繋ぎが好きだな。深いところで陸と繋がってるって気がする」

お互いがお互いの手をにぎにぎするのに満足した頃、海が口を開いた。

嬉しそうに表情を綻ばせてによよと笑う海を見て俺も「そうだな」と返事をする。

「まさかわたし……ボクと陸がこういう関係になるなんて、あの約束をした時には想像だにもしなかった」

「え？ 約束なんかしたっけ？」

「やっぱり忘れてるんだ……ほら、枯れてた陸が彼女を作れるように、ボクと陸のどっちが早くカップルを作るか、つてやつ。結局引き分けみたいなもんだったけどね」

ああ、言われてみれば確かにそんな約束したわ……ご飯の奢りを賭けてたんだっけ。思い出してきた。

でも待てよ、でもあの約束って確か……。

「いや、引き分けじゃなくて俺の勝ちだな」

「え？ 引き分けでしょ。ボクたち同士で付き合い出したんだから同時みたいなものでしょ？」

「あの時の約束はカップルじゃなくて、どっちが先に彼女作るか、つて勝負だったはずだ。で、俺は海っていう彼女ができたけど、海にできたのは彼氏だろ？」

内容を思い出した俺が海に説明をすると、はあ、とため息がひとつ聞こえた。

「なんだ、思い出しちゃったかあ。話題にしなきゃよかった」

「分かっててやったのかよ」

責めるような口調になってしまった俺に対して、海は誤魔化すような表情を浮かべた後。

「わかった、わかりました。ボクの負けです。あーあ、引き分けだったらしい話になると思ったのに、まさか細かい内容まで思い出しちゃうとはなあ」

「勝負のことそのものは忘れてたのにな」

「そうだよ、まったく」

そういう海であったけど、負けたのに特に悔しがったりといった様

子は見られない。あの負けず嫌いだった海翔がこうまで変わるとは。

「えーっと、確かご飯を奢るんだったよね？」

「そうだったと思うけど」

「じゃあさ、その……ちよつと待ってくれない？」

「お金ないんだろ？ 別にいつでもいいよ、ご飯じゃなくても最悪ジュースとかでもいいし」

「そうだけど、そうじゃなくて！」

同時に肯定と否定をする海はどこか恥ずかしそうに。

「どういうことだ、と思っっていると海が続けて言う。」

「お金がないのはそうなんだけどお……。実はね、今、お母さんから料理を教えて貰っててね？ だから、自信がついたら手料理を食べさせてあげるよ。奢るのはちよつと違うけど」

「なるほど。わかった、楽しみにしておく」

「あまり期待しないでね……？」

好きな人の手料理なんだし、それは無理って話だけど、それは言わないでおこう。

「大丈夫、海が作った物なら何でも完食してやるよ」

「……陸はほんともお！ そういうところ！」

繋いでいない方の手でぽこぽこ脇腹を叩いてくる海。

「ほら、もうそろそろ駅だからもう止めろって。手も離すぞ？」

「……ってえ！ 今本気で殴ったろ！おい！」

「陸のばかあああああ！」

——そんな感じで、俺と海の朝は今日も平和に過ぎていく。